

○横濱港海陸聯繫新設備の完成 横濱新港設備完成の祝賀式は客年十二月二日午前十時半より新棧橋上屋に於て大藏内務兩大臣の代理を始め約一千餘名の來賓臨場の上莊嚴に舉行されたり、該工事に就き最初より前後十九ヶ年間其中心人物として事業擔任の衝に當られたる本會常議員丹羽勲彦博士の談によるに横濱港は數十年前防波堤並に舊棧橋落成の當時既に其取扱貨物に對し狹隘を感したるを以て新に設備を擴張せんとの議ありしも不幸成立を見るに至らざりしか其後水上税關長の建議と當時の主税局長目賀田男爵の熱心なる賛成とにより漸く新港設備の計畫に着手する事となれり、然るに該計畫は日本最初の事業にして他日の模範ともなるべきものなりしを以て當時大藏省よりの諮問に授したる我工業界の耆宿古市工學博士は自ら進んで實地の調査並に設計の任に當られ經費約三百萬圓を要する豫定なりしも明治三十一年の議會は之を貳百三十四萬圓に削減する事を決議し新に大藏省内に臨時税關工事を設け目賀田男爵を部長に古市博士を顧問に丹羽博士を課長として明治卅二年五月より其工事に着手する事とな

横濱税關新設備摘録

れり、然るに實地地質調査の結果は埋立工事のみに於ても既に百貳拾七萬圓餘の不足を生じ尙ほ工事の進捗に隨ひ明治卅五年に至りては將來の擴張に支障なからしむる爲め半途にして之を打切るの無已に立至れり、然るに日露戰役後當時の大藏次官阪谷男爵並に若槻工事部長等は戦後經營の急務として熱心に該工事の完成を主張し慎重なる調査の後總經費八百八十萬圓を以て横濱税關設備第二期擴張工事として半途打切の事業を繼續することとし横濱市に交渉の結果同市は進んで該經費の三分の一を負擔する事を承認したるを以て明治三十九年四月更に工を起し當時の建築部長たりし故妻木博士並に現建築課長丹羽博士の周到なる監督と關係技術者の献身的の努力とにより大正六年十一月に至り年を閲する事前後十九ヶ年工費總計壹千四十五萬圓を費して真に東洋有數の貿易港たるに適せる海陸聯絡の新設備を完成せしむるに至れり、尙ほ該工事の詳細は卷を追て登載すへきも茲に新設備の概要を摘録すれば左の如し。

一 工事期間	第一期工事 起工 明治三十二年五月	竣工 明治三十八年十二月
	第二期工事 起工 明治三十九年四月	竣工 大正六年十一月
一 工事費總額	金壹千四拾五萬千九百參拾八圓餘	
一 埋立面積	七、六六〇・六五 ^坪	一面一坪當
		六〇五 ^坪
		三二〇 ^坪

埋立地周圍の繫船壁、物揚場及護岸石垣等の工費を加ふれば一面一坪當

雜 記

一 繫船岸壁	水深干潮面下三十二尺壁、二十八尺壁、二十四尺壁、廿尺壁及十六尺壁以下	一間當	自 九六・八〇 至 一六八・三〇
一 改築したる棧橋	水深干潮面以下三十五尺、船舶繫留區域兩側延長四〇四間	面一坪當	繫留數十三艘 一七・九〇
一 上	木造 三棟 (建坪) 鐵造 十一棟 (同)	面一坪當	八・二〇
一 倉	木造二階建 二棟 (延坪) 煉瓦造三階建二棟 (同)	同上	一三・五〇 一五・〇〇
一起重機	五十噸電氣定置式 二十噸蒸汽定置式 五噸電氣可動式 一噸半電氣可動式	一臺 一臺 一臺 一臺	一八・五二・五 一六・九五・八〇 三・〇七・四〇 九・二九・九〇
一 鐵道	起 重 機 線 計 列 重 車 線	同上	三六・七五 三六・七五
一 發電所	煉瓦造 一棟 (建坪) 發電裝置 蓄電裝置	面一坪當	四三・六〇 二六・三三・五〇 三〇・四七・四〇
一 道	鋪石、碎石及砂利道 花崗石敷、碎石敷	面一坪當	二・三三 一・五〇・四〇
一 構内石敷		同上	二六・六〇
一 下水		同上	二・二〇
一 電線敷設		同上	三三・四〇
一 弧光燈		一間當	一五・七〇
一 水揚場		同上	二〇・四〇
一 物揚場		同上	三三・六〇
一 識岸石垣		同上	三三・六〇

幅員十二間、十間、八間
 附屬設備共
 附屬設備共

建築課長丹羽博士式辭

一事務	所煉瓦造二階及二棟 三階建 (延坪)	九六坪
一橋	萬國橋 新橋 鐵道橋	長百二十呎幅員四十二呎 長百呎同 長百呎同 十五呎半
一曳	海神同	總噸數 一五〇・三 二〇五・六

面一坪當 一九五・〇三
四八、九八・〇三
七二、七九・〇三
一五、三五・〇三
八二、八五・〇三
八一、九〇・〇三

竣成ヲ見ルニ至リタルハ小官ノ此機會ニ於テ深ク感謝ノ意ヲ表スル所ナリ
今本工程ノ重ナルモノヲ舉クレハ
埋立面積 七萬千六百餘坪
繫船岸壁 千百參拾壹間
上屋 十六棟壹萬四千三百餘坪
倉庫 二棟 六千六百餘坪
起重機 扛力五十噸以下 二十臺
鐵道 九哩餘

橫濱稅關新設備工事竣功ヲ告ク爰ニ本日ヲトシテ貴賓ノ臨場ヲ仰キ祝典ノ式ヲ舉行スルヲ得タルハ小官ノ洵ニ光榮トスル所ナリ
抑本港ノ對外貿易ハ逐年増進長足ノ進歩ヲ爲セルニ拘ハラス稅關設備ハ頗ル狹隘不便ニシテ其發展ニ伴フ能ハサリシヲ以テ政府ハ其改良ト擴張トノ急務ナルヲ認メ之カ第一期工事トシテ明治三十二年五月工ヲ起シ同三十八年十二月一日其功ヲ竣ヘ更ニ之カ第二期工事トシテ同三十九年四月工ヲ起シ本年十一月全ク其功ヲ竣ヘタリ歲ヲ閱スルコト前後十有九年施行機關ヲ代フルコト三タヒ工費總計金壹千四拾五萬圓ヲ要セリ第二期工事ノ施行ニ際シ橫濱市ハ其竣成ノ速ナラシムコトヲ希望シ進シテ工費ノ三分ノ一即チ金貳百七拾萬圓ヲ負擔シ明治三十九年度以降六箇年ニ之ヲ納付セリ蓋共同經營ノ爲メ政府ト地方團體ト事業ノ經費ヲ分擔セルハ本港ヲ以テ嚆矢トセリ明治三十九年臨時橫濱港設備委員會ヲ設置セラル、ヤ委員長ヲ始メ關係各官衙橫濱市及橫濱商業會議所ノ各委員諸君ハ本工程ノ重要事項ヲ審議シ懇到適切ナル助力ヲ與ヘラレ今日ノ

ニシテ之ヲ舊來ノ設備ニ比スレハ管ニ其規模ノ數倍セルノミナラス岸壁及棧橋ニハ同時ニ大小十七艘ノ船舶ヲ繫留シ其ノ阜頭ニハ鐵道ヲ延長セルヲ以テ海上解船ヲ介シテ荷役スルノ煩ヲ省キ海陸輸送ヲ聯絡シ貨物ノ損傷ヲ減少シ揚卸ヲ敏速ニシ諸掛費ヲ節減シ船舶碇泊日數ヲ短縮スル等其便否得失固ヨリ日ヲ同フシテ語ルヘカラサルモノアリ又旅客ノ交通ニ至リテハ棧橋上屋階上ニ待合室ヲ設ケ可動渡橋ヲ備ヘ繫船トノ聯絡ヲ保タシメ船客乘降ノ際昔日ノ如ク風雨ニ曝露スルノ不便ナキニ至レリ
新設備ノ利用ハ日向淺ク且多年ノ慣習ハ今猝ニ之ヲ改メ難キ事情アルニ拘ハラス新港取扱貨物ノ數量ハ昨年既ニ略ホ當初

ノ豫想ニ達セリ將來營業者間ニ汎ク其有利ナルコトヲ認識セ
ラレ且自由競争ニ因リ新舊荷役費カ勞費ノ實際ニ照ラシ權衡
ヲ得ルニ至ラハ緊留船舶及取扱貨物ノ益々多キヲ加フヘキハ
自然ノ大勢ニシテ其實現ノ決シテ遠カラサルハ敢テ疑ヲ容レ
サル所ナリ

今眼ヲ轉シテ既往ニ於ケル本港貿易額増進ノ趨勢ヲ回顧セン
カ安政六年開港初年ニ於ケル輸出貿易總價額ハ百拾貳萬餘
圓明治元年ニハ貳千九拾九萬餘圓ニ過キサリシモ本工事ニ着
手セシ明治三十二年ニハ壹億八千四百七拾參萬餘圓トナリ最
近大正五年ニハ七億千九百七萬餘圓ニ達シ依然トシテ帝國諸
港ノ第一位ヲ占メタリ今此趨勢ヲ以テ將來ヲトセン乎前途ノ
有望多幸ナルコト復絮説ヲ俟タスシテ明カナリ

今ヤ世界ノ大戦ニ際シ船舶ノ出入、貨物ノ集散最モ頻繁ヲ極
ムルノ秋ニ方リ税關新設備ノ竣功ヲ告ケタルハ國家ノ爲メ又
横濱市ノ爲メ共ニ慶賀措ク能ハサル所ナリ然リト雖本設備ハ
未タ横濱港改善ノ第一着歩タルニ過キス進シテ諸般設備ノ改
良ト擴張トニ留意シ緩急其ノ宜シキニ從ヒ常ニ適應ノ施設ヲ
愆ラサルハ將來其ノ最モ必要トスル所ナランカ之ヲ式辭トス
大正六年十二月二日

大藏大臣官房臨時建築課長工學博士 丹羽 鋤彦

大藏大臣祝辭

横濱税關海陸聯絡設備工事竣功ニ際シ祝意ヲ述フルハ本大臣
ノ深ク欣幸トスル所ナリ

抑々本港ハ安政六年開港後纔ニ六十年ニ過キササルモ爾來國運

ノ隆昌ニ伴ヒ疑々トシテ長足ノ進歩ヲ爲シ其外國貿易額ハ帝
國開港ノ首位ヲ占メ最近大正五年ニ於テハ約七億貳千萬圓ニ
達シ全國貿易總額ノ三割六分餘ニ相當シ神戸港ト東西相對シ
テ實ニ帝國ノ二大門戸タリ

於是政府ハ嚮ニ日清日露兩役ニ於ケル戰後經營ノ最モ緊急ナ
ル事業ノ一トシテ各開港ニ先タチ本港税關設備ノ改良及擴張
ヲ企畫シ其ノ第一期工事ヲ明治三十二年ヨリ其ノ第二期工事
ヲ明治三十九年ヨリ着手シ拮据經營茲ニ十有九年工費壹千餘
萬圓ヲ費シ今ヤ豫定ノ工程ヲ遂行シ其ノ竣成ヲ告クルニ至レ
リ

第二期工事ノ施行ニ際シ横濱市ハ市財政ノ多端ナルニモ拘ハ
ラス進テ多額ノ工費ヲ分擔シ本事業ノ竣成ニ寄與シタル功勞
ニ對シテハ本大臣ノ大ニ感謝スル所ナリ
木工事ハ横濱港改善ノ第一着歩タルニ過キササルモ船舶ノ緊留
海陸運輸ノ聯絡及貨物ノ取扱ヲ便ニシ輸出入貿易ノ増進ニ多
大ノ效果ヲ與フヘキハ信シテ疑ハサル所ナリ冀クハ自今一層
官民相協力シ本設備ノ機能ヲ發揮セシメ尙進シテ臨港諸設備
ノ改良ニ銳意講究ヲ加ヘ大平洋上本港特殊ノ位置ヲ利用シ戰
後世界的貿易ノ變遷ニ對應シ横濱港ノ繁榮ト共ニ帝國對外貿
易ノ發展ニ遺憾ナカラシメントテ一言以テ祝辭ニ代フ
大正六年十二月二日

大藏大臣 勝 田 主 計

有吉神奈川縣知事演說の大要

今回落成したる工事は横濱税關擴張工事と稱すれとも實は横

濱築港工事なり此故に防波堤の築造を第一期とすれば今回の
 工事は第二期の横濱築港と稱すべく、吾人は更に進んで第三
 期築港工事の起らん事を望むものなり固より現工事の完成に
 よりても海陸運輸の利便の増進する事果し幾許なるや計ら
 れず随つて横濱貿易の上に偉大の効果あるべきは疑を容れさ
 る事なるべく此意味に於て吾人は深き祝意を表すると共に之
 を完成せしめられたる大藏省關係者に對し其勞を謝せざるべ
 からざるも政府當局、横濱市長、市會並に市民の努力をも忘
 るべからざるものあり尙ほ之を有益に使用すると無用の長物
 たらしむるとは當事者の關する處にあらずして今後之を使用
 する人の覺悟如何に存す、横濱市の貿易額は荷物に於て現今
 貳百四十六萬噸を超へ之を工事前に比すれば三倍半の増加に
 して尙ほ益々發展すべき趨勢を示し居れり故に尙後極力新設
 備を利用して貿易の發展を圖り現築港をして尙ほ狹隘を告げ

しむるに至れば之れ實に横濱市民が事實上工事關係者に酬ふ
 るに最善を盡したるの證左なると同時に國家的に大に慶賀す
 べき現象なりと認む故に神奈川縣治の印綬を帯ひたる知事と
 しては横濱港か不遠第三第四の擴張を要求するに至る如く駭
 々として發展せん事を望むものにして此の如き時期の到來す
 ると否とは一に新設備を利用する人士の努力如何にあり、是
 れ余か本港に於て第三期大擴張計畫の議せらるるの秋の一日
 も早く來る事を期して待たんとする所以である云々

○年賀狀 本會へ年賀狀を寄せられたる左記諸君並に團體に
 對し謹て謝意を表す

- 乾慶藏君 石田收君 伊與田清吾君 飯塚信輝君 猪苗代
 水力電気株式會社殿 池田永吉君 稻葉源君 飯塚重則君

雜 記

- 原田鎮治君 林静介君 服部金太郎君 濱田晴高君 花村
 米三郎君 發明品製造株式會社殿 服部俊一君 箱石朝政
 君 原綱之輔君 島山一清君 新田帶革製造所東京出張店
 殿 二宮正君 日本橋梁建築合名會社殿 西大條覺君 堀
 内虎太郎君 東北帝國大學工學專門部土木科殿 小川信次
 君 小原益知君 太田資時君 大津新太郎君 大垣登君 大
 澤準一郎君 大坪一郎君 小川一眞寫真館殿 小田川全之
 君 大矢貢君 大藤高彦君 小野政精君 岡村利重君 沖尚
 介君 小野喜六君 小川東吾君 奥田助七郎君 大島製鋼
 所殿 神村景福君 川上浩二郎君 河手長平君 加藤光之
 助君 神木健介君 關西商工學校殿 上倉俊君 勝又愛治
 郎君 川口豐太郎君 加藤千代吉君 桂山信敬君 加藤三
 十郎君 吉田葆君 田邊淳吉君 田代瑞穂君 田中吉二君
 田中鷹太郎君 武永常太郎君 高橋邦太郎君 田中銳太郎
 君 並河常太郎君 中大路氏爲君 中川宗一君 永原量平
 君 中村武治君 中島於菟太君 中村宗太郎君 中村修道
 君 中村公元君 村山源吾君 野口廣衛君 野々下高助君
 野田六次君 熊野彦藏君 熊本高等工業學校土木教室各位
 久芳準平君 久保田實君 久永勇吉君 山縣修君 八木秀
 次君 保岡勝也君 山内治平君 山本常雄君 松田健作君
 松井兵次郎君 松江圖書館殿 松浦衛男君 古河合名會社
 殿 古河鑛業會社殿 古河商事株式會社殿 藤山信治君
 伏田鐵工所殿 伏田清三郎君 福井薰君 二日市貞一君
 小山友直君 小村捨楠君 ギイツク、カー、エンド、カムバ
 ニー、リミテッド殿 手塚熊太郎君 青木元五郎君 淺井
 芳之助君 有賀定吉君 相浦雄太郎君 佐野利器君 眞田

五九

雜記

秀吉君 澤藤幸治君 齋藤精一君 齋藤平太郎君 木村重
 雄君 木村耕三君 木村福松君 北村多賀太郎君 衣川清
 一君 濱口竹雄君 三代貞太郎君 下村尚義君 清水庄太
 郎君 志岐信太郎君 平井新六君 森經義君 森良藏君
 森島智雄君 茂庭忠次郎君 關口固君 仙石亮君 杉谷安
 一君 周防庄太郎君 菅良二君 鈴木鎮雄君 須藤清吉君